

見巧者も初心者も楽しませる 地主版「コッペリア」の真骨頂

地主 薫さん(左)と奥村康祐さん(右)
(地主 薫バレエ団・吹田市)にて

人形と知らずにコッペリアに好意を寄せる村の青年フランツと、それに気を揉む恋人のスワニルダ。ある日、スワニルダはコッペリアの正体を確かめようと、偏屈な老人人形師コッペリウスの工房に忍び込む…。

2012年5月梅田芸術劇場にて上演したグランド・バレエの名作「コッペリア」(写真右下)で、同年度の大阪文化祭賞奨励賞を受賞した地主薫バレエ団。同団は、2008年上演の「ロミオとジュリエット」でもバレエで初めて大阪文化祭賞グランプリを受賞するなど、今年創立25年の比較的新しいバレエ団でありながら、その実力はすでに定評がある。昨年受賞のコッペリアでは、地主さん独自の演出と、主役(フランツ)を務めた奥村康祐さんの二人を中心に、団員全体が力を発揮して魅力的な舞台に仕上げた点が高い評価を得た。

「大人から子どもまで楽しめる舞台にしたい」という地主さんは、初めてバレエを観る人でも楽しめる分りやすい演出を身上とする。コッペリアでは、各幕の冒頭でストーリーを紹介したり、通常は舞台上手前にあるコッペリウスの工房を舞台正面に配し、客席のどの位置からも人形コッペリアが動いているところが分かるような配慮もした。物語を良く知る人は、客席から工房が見えなくても音楽を聴いているだけで「今、コッペリアが動いている」と察するが、知らない人はそうした想像が働かないからだ。

こうした前説や舞台設定は見巧者にとっては不要なのかもしれない。しかしバレエ初心者にとっては、物語の世界により早く深く入り込む手助けとなる。演目によって演出の自由度は異なるが、地主さんはすべての観客にバレエの面白さを知ってほしいからこそ、そうしたサービス精神を怠らない。原典に固執せず、偏屈なコッペリウスを「じつは心優しい老人」にしたり、コッペリウスに見つかった人形のふりをするのがスワニルダだけではなく、フランツの友人たちも一緒だったりと、登場人物の性格や

展開にも工夫。こうした意外性は、地主版「コッペリア」ならではの魅力だ。今年11月7日にフェスティバルホール(大阪市北区)で上演予定の創立25周年記念公演「シンデレラ」では、なんとシンデレラの生い立ちが明かされるとか。「創立25年の若いバレエ団だからこそ、思い切ったチャレンジもできる」と地主さんはいふ。

一方、「ロミオとジュリエット」「コッペリア」ともに主役を務めた奥村さんは、5歳から地主さんに師事する同バレエ団の中心的存在。国内外での受賞歴も多い。2011年には文化庁芸術祭新人賞を受賞し、現在、新国立劇場バレエ団(東京)のダンサーとしても活躍する。今年3月16日には日本バレエ協会公演「白鳥の湖(東京文化会館)」で王子役(ジークフリード)を務め、6月30日に新国立劇場バレエ団で上演予定の「ドン・キホーテ」では、主役(バジル)に抜擢された。

奥村さんが目指すのはクオリティーの高いバレエ。そのために「できるだけ多くの役をこなし、自分の芸術性を高めていきたい」という。端正な容姿に王子役として天賦の才を感じさせるが、地主さんいわく「ひたすら努力するタイプ」。演技力にも優れ、昨年11月のアートアセンブリーでは、文楽太夫とのコラボレーション作「大蛇退治(おろちたいじ)」で、素戔鳴尊(すさのうのみこと)を好演した(P12参照)。ここでも地主さんの創意と奥村さんをはじめ団員たちの個性がきわだつ、地主バレエの新境地を見る思いがした。

(ライター 三上祥弘)

地主 薫さん
(地主 薫バレエ団・代表)

奥村康祐さん
(同 バレエ団・プリンシパル)

平成24年度大阪文化祭賞奨励賞受賞

地主薫バレエ団公演「コッペリア」
(2012年5月20日・梅田芸術劇場)
photo ©尾鼻文雄

